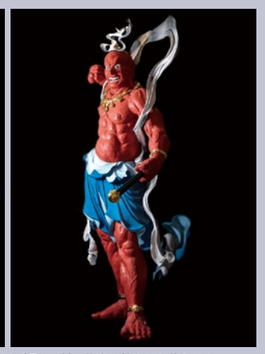
人の手で仏を彫るのではなく木のなかにおわす仏の姿を鑿と木槌で探してるのです。

古都・京都には各宗派の本山はじめ、数多の寺院が点在し、市内だけでも一万七千もの寺院があるといわれます。その上、小さな祠に奉られる石のお地蔵さんはほぼ町内ごとにあり、神仏に手を合わせ、祈ることは日本人、とりわけ京都人にとってはまさに日常茶飯の営み。その祈りの対象―仏像や祖師像は、仏像彫刻専門の工房―佛所で仏師と呼ばれる匠が造仏します。京都には数カ所の佛所がありますが、初代の丈五郎、二代目・朋琳、三代目の宗琳、そして現所長の佳遊と仏像彫刻の技をつなぐ大佛師松久宗琳佛所の若き匠・松久靖朋さんにお話をうかがいました。

仏師
松久靖朋（まつひさせいほう）さん

さまざまな仏像が展示され、それぞれの仏像の特徴が解る展示室



群青と赤の金剛力士像。口をあけた阿形と閉じた吽形、一対で物事の始まりと終わりをあらわしている

矜羯羅童子と制吒伽童子を脇侍に従えた靖朋氏作の不動明王。右手に宝剣、左手には羂索（けんさく）と呼ばれる縄を持つのは、煩悩を断ち、人を救い出す持ち物だという

仏の強さや優しさを知ることから

「大佛師松久宗琳佛所」は京都の中心、御幸町三条下ルにあります。元は京町家であったらしく、間口に比して奥行きの深い近代的なビルの二階が工房で、数人の仏師たちがそれぞれの仏像と向き合って仏像を彫っています。自らも仏師であり、当佛所の所長である佳遊さんは三代目宗琳の二女で、長女の真やさんは靖朋さんの母。糸状に切った金箔で仏像を装飾する截金（きりがね）師であり、彩色を手掛ける彩色師でもあります。松久家は文字通り一家を挙げて仏像製作に携わる匠の一族です。

「松久家に生まれたことがそもそもの縁。子どもの時から仕事場に出入りして彫刻刀で遊び、大学時代も仏像彫刻の教室に通って祖父の弟子だった仏師から基礎的な技を学び、ごく自然に仏師を生業とすることを選びました。ほかにやりたいことがなかったわけではありませんが当家に生まれ、ここで育ったという大きな縁に導かれてのことです」。三十七歳の靖朋さんはその覚悟のほどを爽やかに語ります。

一口に仏像といっても多様で、仏の格、役割、序列があり、それぞれに持ち物や印の結び方、衣など特徴的な形があって、ざっと千以上の種類があるそうです。また、達磨大師や空海、最澄、聖徳太子といった祖師像等の製作も仏師の仕事です。

「仏像には主に〝如来〟〝菩薩〟〝明王〟〝天〟の四種があります。最上格は〝如来〟で、釈迦の姿を写した〝釈迦如来〟や〝阿弥陀如来〟〝薬師如来〟〝大日如来〟があり、その次は〝菩薩〟。この仏も〝聖観音菩薩〟〝弥勒菩薩〟〝十一面観音菩薩〟〝地蔵菩薩〟等があり、その下の〝明王〟と呼ばれる仏は忿怒相で武器を持ち、邪気を調伏する〝不動明王〟や〝愛染明王〟のほか、孔雀にのった〝孔雀明王〟が有名ですね。そして〝天〟は〝帝釈天〟〝梵天〟〝阿修羅〟〝弁財天〟。天は、いわば、仏法と仏教世界を守るガードマンといったところでしょうか。それぞれの仏像は役割や救済の内容、性格などが異なり、衣や頭髪、

松久靖朋　プロフィール

昭和61年（1986）京都生まれ。松久宗琳の長女で「松宗院截金」代表の松久真やの長男。神戸芸術工科大学卒業後、大佛師松久宗琳佛所入所。仏像彫刻の基礎を学ぶ。古代からの伝統的な造仏の様式を守り、踏襲しながらも現代人の感性に響く造仏の研究を日々行っている。主な実積に、令和元年、比叡山延暦寺「広野像」、法隆寺「伎楽面」東京国立博物館蔵 復元模造。令和二年、北海道大道寺「千手観音菩薩」

手の印、持ち物、容姿などが違う上、それぞれ仏像のバリエーションもあり、それらの決まり事を踏まえた上で彫っていきます」と靖朋さん。

多種多彩な仏のことを調べるのには、かなり時間がかかるが、それぞれの仏の霊力や救済力、優しさや厳しさを学ぶことも仏師の修業で、知的好奇心が刺激されて楽しいだけでなくありがたい気持ちになるのだと語ります。

先人が残した原型と賽割法

造仏の技術は、一木で彫り上げる〝一木造り〟と、体軀を幾つかの部材を矧(は)ぎ合わせてから彫る、〝寄せ木造り〟の二種類があるそうです。

木の中にすでにある布袋の目や鼻や口を探り出すように布袋像を彫っていく靖朋氏

大小様々な彫刻刀は、靖朋氏の手作り。すべて根来塗の柄で統一されている

「寄せ木造りのひとつである〝賽割り法〟は、〝原型〟と呼ばれる縮小版の仏像を造るのです。それは、断面に四角い賽の目を碁盤のように引いた材を矧ぎ合わせてから彫刻を完成させ、その原型を分解し、断面の形状を測定し拡大します。この技のおかげで、たとえば丈六(一丈六尺)と呼ばれる五メートルもの高さのある仏像でも原型の賽の目をトレースして拡大すれば同じ比率でどんな大きな仏像でも彫れるのです。それを〝賽割り法〟と呼び、鎌倉時代の運慶や快慶の時代からある技法です。その賽割り法の原型となる仏像を、祖父・宗琳が後進のためにたくさん残してくれているので、とてもありがたい」と靖朋さんは先人への感謝を忘れません。

仏像の材は、木をはじめ金属や石、粘土などがあり、それぞれに醸し出す雰囲気が異なりますが、木の仏像は温かみがあり、時間が経つほどに深みが増していくと靖朋さんはいいます。代表的な木材は檜や楠で、ほかに榧(かや)や桂。腐食しにくいのが第一の理由だそうですが、木目が細かく、表情や指先など、微妙な表現がしやすいのだとか。一木造りなら大樹の多い楠で、檜なら寄せ木造りでと適材を使い分けるそうです。さらに、木の仏像は截金や彩色がしやすいため、仏像を美しく荘厳することができるのも魅力で、靖朋さんの彫った仏像に、母・真やさんが截金で美しく荘厳するという母子合作の仏像もあります。

木のなかの仏の姿を探しあてる

宗淋、佳遊、靖朋の手掛けた仏像の一部は、五階の展示室で一堂に会し、仏たちはさながら会議でもしているといった趣。そして、朋琳、宗琳、佳遊、靖朋と続く技の系譜を実感できる場でもあります。

「正統な造仏を尊重した祖父・宗琳からは『個性を出すな』といわれてきましたが、松久佛所の仏像はどことなく優雅だといわれます。仏像には、平安、鎌倉、室町とそれぞれの時代ごとに特色があり、仏師の個性も滲み出ます。たとえば、叔母・佳遊の彫った仏像は、やはり女性的な優しさを感じます。仏像は美術品である前に祈りの対象ですから造り手も精魂をこめます。ですから自ずとその人となりが滲み出るのでしょうね。木のなかから仏の姿が現れてくるまでは、まさにその仏と対峙している感じです。木のなかにはすでに仏がいると信じて仏師はそれを探しあてるのです」と靖朋さん。靖朋さんの曽祖父・朋琳はよく「ここに顔、ここには腕が見える」といっていたとか。まだ姿を現さない時点で仏の顔や姿が見えてくるのだと。そして、彫刻中は常々、「ここで、よろしゅうございますか?」とお伺いを立てながら鑿(のみ)をうごかしたといいます。そういえば、『夢十夜』という夏目漱石の短編十話で、仁王像を彫る運慶の夢の話があり、『なに、あれは眉や鼻を鑿で作るんじゃない。あの通りの眉や鼻が木のなかに埋まっているのを、鑿と槌の力で掘り出すまでだ』と、見物人が語る場面がありましたが、仏師とはまさしく、そんな妙境を味わえる特別の匠であるのかもしれません。

靖朋氏の祖父・宗琳氏が残した賽割り法の原型。幾つかの部材に分解し、各パーツ断面の賽の目を拡大することで大きな仏像も同比率で彫り上げることができる

文ー石橋郁子　写真ー大道雪代